

放課後

のいま



ゆうやけ子どもクラブ
村岡真治

活動時間を長くしたりする。そのため、人件費が膨らんで赤字になる。事業所の運営状況に、著しい格差が広がっている。

●薄っぺらな「ニーズ」理解

さらに、「もうけ主義」の流れによって、活動の内容にも、子どもを育てることとは異なる質なものが入り込んできた。ある集まりでのこと。若い職員が、自分の事業所を紹介した。「弊社では、ご利用者様のニーズにお応えしてサービスを展開しております」。まるでビジネスマンのような口調。「具体的には、何をしているのか?」。私が問うと、こんな返答だった。「お子様の将来の自立をめざして、ボルトをナットに入れる訓練や、挨拶をする練習をしております」。別の学習会では、報告した若い職員に、会場から質問があった。「あなたの仕事のやりがいは何か?」。回答は、「仕事が賃金で評価されること」。子どもを新規に紹介したり、保護者と面談したりすればポイントが付く、出来高制の賃金になっていた。

(ああ、なんということ!)。私は、こうしたことを見聞きするたびに、胸がふさがれる思いがする。せっかく放課後活動の職員になった若者が、放課後活動の実践やその喜びを知らないままに働いている。福祉が、商品としてのサービスの売り買いに置き換わる。そのことで、私たちの実践や労働が、本来あり方から離れつつある。私たちが「放課後活動の制度化」に込めたねがいは、半ば、歪められて、具体化された。

●制度を改善し、実践を創造・発信する

2018年4月、報酬が大きく改定される。放課後等デイサービスについては、「障害が重い」と判定される子どもが半数を超える・超えないで、「区分1」「区分2」に分かれる。報酬の基本単価は、厳しく抑え込んだうえで、「区分2」では、さらに引き下げられる。子どもの「障害の重さ」を判定するのは市町村。適切な判定がなされるかどうかは、現時点ではまだわからない。

ゆうやけの場合、もしも「区分2」となれば、1事業所あたりの給付費は13%減。3事業所分では1千万円以上の減収。これでは到底存続できない。「もうけ主義」の出現や、事業所間の財政格差は、決して自然現象ではない。根本の原因は、「福祉も商品」と見なす政策や、それにもとづく制度の仕組みにある。だが、今回の改定では、「もうけ主義」と無関係の事業所まで抑制されかねない。しかも、制度の仕組みは複雑になるばかり。私たちに課されているのは、2つの課題。

①放課後等デイサービスを、子どもを育てるにふさわしい制度へと改善する(「もうけ主義」の参入を規制するとともに、事業所運営を安定させる制度へと抜本的に改正する)。

②子どもの人格を育てる実践を創造し、放課後活動にふさわしい実践を社会に発信する。放課後活動が制度化された段階にふさわしい実践・運動を進める。その勇気と確信が今、必要とされているのではないか。

(むらおか しんじ)

【第1回】 勇気と確信をもち、 制度改善にふさわしい運動・実践を

は、私たちの運動の成果にほかならない。だが一部で、深刻な問題が起こっている。1つは、活動が「もうけ」の対象になっていること。「起業3年で年商3億円」「低リスク、高リターン」などという宣伝が横行する。もう1つは、報酬を不正に請求して処分を受ける例が続いていること。マスコミも、「不正が相次ぐ」「不適切な運営があとを絶たない」などと報道している。今や、「福祉も商品」と見なす「もうけ主義」と、そのためなら何でもしていいという動きが放課後活動にも流れ込んできた。

その一方で、充実した運営をしようとする、厳しい財政運営を強いられる。私が職員をしている、ゆうやけ子どもクラブ(以下、ゆうやけ)は、子どもの実態に合わせて、指導員の人数を手厚くしたり、夏休み中などの

ても、その理解は薄っぺらなものにならざるをえない。

●親のねがいを実践し、つなげる

宏之(自閉症)は小1で、ゆうやけに入ってきた。母親から事前に要望があった。「人を叩くので、叩かせないでください」。宏之は活動中、たしかに私の体をパチンと叩いてくる。だが私と目が合うと、(追いかけてほしい)と言わんばかりに、逃げるそぶりをする。



▲手作り楽器で「音楽会」

(「叩く」という行為には、他者と関係を結びたいというねがいが込められているのではないか)。私は、宏之が叩くことを、叱ってやめさせようとはしなかった。むしろ、気持ちのやりとりをする機会としてとらえた。「叩いたのは誰だあ?」。私はわざと、大げさに言いながら、宏之を抱きかかえる。グルリと振り回してから、畳の上に寝かせる。そして、両手をかざして、(くすぐるぞ!)と何度か迫る。すると宏之は、待ちきれなくなつて、自ら笑い出す。私は、それを待って、脇腹をくすぐる。「コチョココチョコ」。

こんなことを数回繰り返すと、宏之は私を叩かなくなる。(関わってほしい)という気持ちがあるに受け止められたからだろう。そのあと私は、みんなに、「おやつにしよう」と呼びかけた。すると宏之は、私のあとをついて歩く。私が布巾を渡せば、私と一緒にテーブルを拭く。コップの載ったトレイを持たせれば、テーブルまで運ぶ。気持ちを通じ合う相手とは、行動をともしたくなるに違いない。

後日、母親と話す機会があった。母親は、私の話を聞いて驚く。「ゆうやけでは叩かないんですね。私は、叩かせない指導を直接したのではない。いわば、叩かなくても指導をしたと言えませんか。親の言葉を、表面的に受け取る必要はないのではないか。言葉に込められたねがいの切実さを汲み取る。そして、言葉に「託された」ねがいを私たち自身の実践にくぐらせる。「ニーズに応える」とは本来、こういうことを言うのだと私は考える。